

広報 2014 2月
No.1000 第1金曜日号

ひらつか

広報ひらつか 1000号



目次	1~5面... 特集 あなたと市をつなぐ広報...広報ひらつかの年表や広報に関わる人・団体を紹介します。	平塚市の人口と世帯数 <平成26年1月1日現在()内は前月比> 人 口 258,076人...(-44) 世帯数 105,774世帯...(-22)	◎発行/平塚市 ◎編集/秘書広報課 〒254-8686 神奈川県平塚市浅間町9番1号 tel 0463-23-1111 fax 0463-23-9467 http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/
	4~7面...お知らせ・募集・健康と福祉・スポーツ		
	8面...ヒラツカルチャー「今、会いたい作品」		

● ● ● 広報ひらつかが届かない場合は (有)ミッド ☎0120-350311(月~金曜日、午前9時30分~午後5時)へご連絡ください。 ● ● ●

あなたと市をつなぐ

広報

1949(昭和24)年10月20日に誕生した広報ひらつかは、今号で1000号を迎えました。今回は広報ひらつかに関わる人々や、65年の歴史などを紹介します。

秘書広報課 ☎21-8761



平塚の魅力伝えます

市民と市のパイプ役

事業内容などを知らせる、または宣伝などの意味で使われる「PR」という言葉。Public Relationsの略で、日本語の「広報」の語源です。

Public Relationsを直訳すると、「市民(民衆)との関係」です。広報ひらつかは、市民の皆さんと市をつなぐ役目を担っています。

最新の姿を伝える

現在の広報ひらつかは毎月第1・第3金曜日に発行し、市内の全世帯に届けています。特集記事やお知らせ記事、コラム、イベントのレポートなどで、市の最新の姿を伝えています。

行政の情報を知らせるだけでなく、市民の皆さんに自分たちの住むまちに関心を持ってもらうのも、広報の大切な役割です。人物・観光・イベントなど、市の魅力を再発見

特集で詳しく紹介

紙面は特集とお知らせで構成しています。1つのテーマを掘り下げて紹介するのが特集です。お知らせの限られたスペースで紹介するのが難しい内容や、特に大きく取り上げたい内容をクロージアアップします。分かりやすく情報を伝えられるよう写真やイラストを入れ、4コママンガを使うこともあります。

スポーツで活躍する方や地域活動に取り組む方、魅力的な活動をしている方など、多くの市民が登場しています。お知らせは原則として募集・お知らせ・福祉・スポーツの4分野で掲載しています。

写真で訴求力高める

タブロイド判(新聞の半分サイズ)の大きさを生かし、平成22年4月から、表紙は大

きな一枚写真を基本にしました。表紙に大きな写真を使うことで迫力を出すなど、視覚的な効果を狙っています。また、目に付きやすく、気軽に手に取ってもらえるという効果もあります。

日本広報協会が実施する全国広報コンクールで、平成24年8月第1金曜日号の表紙写真(左)が入選1席で、読売新聞



「ひらつかさん」の作者中野勇さん(91歳)は、長年4コマ漫画を描き続けた中野さんですが、本職は漫画家ではなく教師でした。同僚には、本名よりもペンネームの「またか」で呼ばれることが多かったといいます。

4コマ漫画を30年連載

「ひらつかさん」の作者
中野勇さん(91歳)



「本当に、思い出に残る仕事をさせてもらいました」

広報ひらつか64号(昭和32年5月10日)〜429号(昭和62年4月15日)で30年間、「ひらつかさん」という4コマ漫画を連載した中野勇さん。勇の字をばらすと上から「またか」と読めるのがペンネームの由来です。

味のある筆致と、ユーモアあふれるセンスが中野さんの漫画の特長です。広報ひらつか以外でも腕を振るい、読売新聞社の「読者マンガ腕くらべ」で1位をとったり、教育関連の本にイラスト付きの連載コーナー

を持つたりしていました。

長年4コマ漫画を描き続けた中野さんですが、本職は漫画家ではなく教師でした。同僚には、本名よりもペンネームの「またか」で呼ばれることが多かったといいます。

「ひらつかさんは私自身」と話す中野さん。マンガのアイデアについては「話の内容で悩むことはあまりなかったですね。実生活の中から生まれた話もありますが、自分の頭の中で考えることが多かったかな」と振り返ります。

中野さんが一番気に入っているのは、48号(昭和61年5月15日)の、犬のフンの始末について描いた話(左)です。犬の散歩をしたひらつかさんがマナーを気にし、犬のフンを始末するためにちりとりを作るという話です。自身が犬を飼い始めたときに、いろいろなマナーを気にするようになったのが、発想のきっかけだと言います。

「マンガのように始末している人がいたよ」と報告してくれる人もいてね。少しは平塚市民のマナーアップに貢献できたかなと笑います。中野さんは毎年、イラスト入りの年賀状(写真で中野さんが持っているのが原画)を作っています。教え子たちからは、「ひらつかさんに良く似たイラストが入った年賀状を見ると、楽しかった子ども時代を思い出す」と好評だそう。今も多くの人の心の中で、ひらつかさんは生き続けているようです。

中野さんは、ぼくらの生みの親だケロ♪



中野さんの一番のお気に入り

広報ひらつかができるまで

①企画 発行日の2カ月前

取材や企画内容を編集会議で決めます。広報を担当する職員全員で「どんな切り口で紹介できるか」「どうやったら効果的に伝えられるか」など、意見を出し合います。

特集記事は2カ月前には企画を決め、お知らせ記事は1カ月前には内容を決めます。特集記事の担当者は普段から各課の動きやニュースなどの情報収集を心掛け、特集に反映しています。



②取材 発行日の4週間前

取材には、ペン・ノート・カメラを持って向かいます。取材後、内容によつてはさらに裏付け取材などをして、原稿を書き進めます。取材相手の思いや考えを読者に伝えられるよう、注意しながら文章を書き上げます。

表紙の撮影は、最も苦勞する部分です。撮影が数日間にあたることもあります。



③編集 発行日の2週間前

原稿が完成したら編集作業を始めます。発行日の2週間前が、印刷会社に原稿を出す締め切り(出稿)です。

パソコンで専用のソフトを使い、レイアウトや画像の加工、イラストの作成などをします。

編集後、広報を担当する職員全員で、内容のチェック(校正)をしてから出稿します。



④発行 毎月第1・3金曜日

出稿の3日後に印刷会社から、デザインなどが入った原稿(初稿)が来ます。その2日後に印刷会社に職員が出向き、最終校正をします。

校正が終わって刷り上がった広報ひらつかは、ポスティングの業者が3日掛けて、皆さんののもとへ届けています。

関わる部門での受賞は46年ぶりでした。

音訳や電子書籍も

視覚障がいのある方へ、広報ひらつかを声で届ける「声の広報」と点字版の広報も発行しています。

また平成23年1月第1金曜

日号以降の広報ひらつかを、電子書籍(E-PDF形式)として配信しています。電話や関連サイト、動画などへのリンクがあり、紙とは違った便利な使い方ができます。iPhoneやAndroidをお持ちの方は、最新号の自動受信などができる、ポッドキャストリングも利用

声で伝える面白さ

声の広報を製作 平塚音訳赤十字奉仕団

「声の広報を通して、広報ひらつかの面白さを伝えたいですね」と話す、平塚音訳赤十字奉仕団の副委員長・新谷美栄子さん。声の広報は毎号、

平塚音訳赤十字奉仕団の皆さんが、ボランティアで作っています。

「表紙の大きい写真や特集には、広報の職員も特に力を



左から猪股みち子さん、新谷美栄子さん、岩田由紀枝さん、海老沢芳子さん。パソコンで専用のソフトを使い、編集作業などを行っています。

できます。Timesの公式サイトから、広報ひらつかのチャンネルをご覧ください。電子書籍の広報をTimesで配信するのは、全国の自治体で初の試みでした。

これからは質の高い広報紙を目指して、広報担当一同、まい進していきます。

入れているのではないでしょう。か。その気持ちを想像して、こちらにも気合いを入れて読んでいます。

同団では、40〜70代の32人が活動しています。広報ひらつかのほかにも、盲学校で使用する教材から小説・旅行情報誌・料理本・図鑑・家電の取扱説明書・国家試験の教材に至るまで、さまざまな本を音訳しています。

写真や絵は、聞く人が頭の中で思い浮かべられるように構図などを具体的に説明し、色は具体的に言うこともあれば、暖かい色、冷たい色など感覚的な説明を選ぶこともあります。

聞きやすく正確に

委員長の岩田由紀枝さんは「大切なのは、はっきりくつきり正確に読むこと。広報ひらつかは日付や人名、地名などが多いので、読み間違いをしないように注意を払います」と話します。また、相手は耳だけで聞いているという点も意識して、息継ぎのタイミングや文章を切る位置などにも気を配っています。

岩田さんは「広報ひらつかは、毎号2人体制で音訳しています。いつも締め切りが短

広報ひらつかを製作していた高田謙治さん

「大好き平塚」を胸に



昭和61年〜平成6年の9年間、広報を担当していた高田謙治さん(左は当時の写真)。平成5年3月15日発行の500号も担当していました。

広報にいた9年間で、私は平塚が大好きになりました。現在働いているまちづくり財団の名

刺にも、「大好き平塚」という一文を入れています。

私が広報を作っていた当時の平塚は、とても活気がありました。人口が25万人を突破し、総合公園や美術館ができたり、七夕まつりが過去最高の人出を記録したり……。広報担当として平塚市を市内外にPRできることに、喜びを感じていました。

あの頃の広報は課長と私の2人で作っていました。私が担当していたのは2〜8面です。休日も取材が入り、夜中まで出張して校正をするなど忙しい日々で

したが、不思議と嫌になつたことはありませんでした。

広報紙を作った経験は、私の仕事人生の原点になっています。文章の書き方や色の使い方など、どの部署に行っても役立つ、貴重な経験をさせてもらいました。

広報を作る上で必要なのは、読者の思いを想像することです。行政の情報を一方的にお知らせするのではなく、双方向にコミュニケーションをとる。そんな媒体であつて欲しいと願っています。

いので大変ですが、楽しい作業ですよ」とほほ笑みます。

一人が受け持つ時間は、およそ40分です。40分の音訳データを作るのに、3〜5時間かかります。原稿の下読み・声の吹き込み・編集・校正といった作業を、1日半で進めています。

手助けをしたい

岩田さんは「点字が読めない方にとっては、音訳は情報

を得る大切な手段です」と力を込めます。「人間が受け取る情報の8割は、視覚からと言われています。私たちの音訳で、視覚障がいのある方が情報を得るお手伝いが少しでもできればいいな、と思っています」。

同団ではメンバーを募集しています。詳細は、**市社会福祉協議会ボランティアセンター** ☎33-0007へお問い合わせください。